

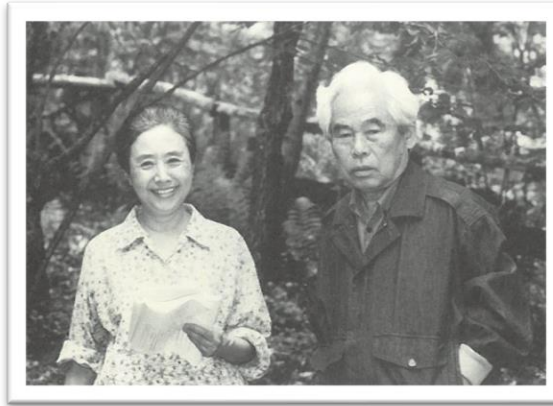


## 逗子にゆかりのある文化人 を知りたい

温暖な逗子は静養地に選ばれることが多かった。

資生堂の福原義春は子どもの頃からなじみのあった逗子を結婚後に住まいにした。また、ニッカウヰスキー創業者、竹鶴政孝の妻リタは、療養のため逗子の海岸近くの家で晩年を過ごした。

かつて大船に撮影所があったため、逗子に住む映画関係者も多かった。映画監督の新藤兼人は、録音技師からの紹介で逗子の家を選んだと著書に書いている。



新藤夫妻『ながい二人の道－乙羽信子とともに－』より



竹鶴夫妻『リタと旅する。－日本のウイスキーの父「竹鶴政孝」を支えた妻－』より



東郷橋（昭和30年代）『逗子フォト』より

図書館探偵  
レファレンス事例 No.14  
2024年3月発行

## 逗子ゆかりの 文化人とその作品



逗子海岸より富士を望む 写真：逗子フォトより

逗子市立図書館  
046-871-5998

逗子市に関するレファレンス事例は、逗子市立図書館ホームページで閲覧できます。

<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

		請求記号
<b>小磯良平</b> 1903～1988 画家 逗子にアトリエを構えた		
『絵になる姿—小磯良平画文集—』 小磯良平著 求龍堂 2006		723 コ
『小磯良平展—いま、ペールをめぐ 小磯芸術 受贈記念特別展—』 小磯良平画 神戸市立博物館／編集 1990		B 723 コ

		請求記号
<b>新藤兼人</b> 1912～2012 映画監督 逗子に居住		
『ながい二人の道 —乙羽信子とともに—』 新藤兼人著 東京新聞出版局 1996 “昭和五十三年一月十八日、わたしは <b>逗子</b> の市役所へ行って、乙羽信子と新藤兼人の結婚届を出した。～中略～乙羽さんに電話をした。「えっ、わたしは行かなくていいんですか」と不満そうな声がかえってきた。「君と一緒にいったら、市役所の人みんな見るよ」「でも、一緒に行きたかったわ」”		778 シ
『歳月は風の吹くままに』 新藤兼人著 朝日新聞社 1993 “撮影所の録音技師が、 <b>逗子</b> に家があるから買わないかと教えてくれた。～中略～ <b>逗子</b> は、旧横須賀海軍の軍人の住宅が多いとかで、小ぢんまりとした住宅が生垣に囲まれて、庭の植え込みも青く繁っていた。折から桜が満開で、川べりの桜並木には盛りあがるように咲き競っていた。わたしは、はやここに住もうと決め、目的の売り家に向った。”		914.6 シ

		請求記号
<b>竹鶴政孝</b> 1894～1979 実業家 妻リタの療養のため逗子に居住		
『リタの鐘が鳴る —竹鶴リタの生涯—』 早瀬利之著 朝日ソノラマ 1995 ニッカウキスキー創業者の妻リタに関するノンフィクション。 “ <b>逗子</b> の海岸に近いところに平家の、庭付きの家が見つかった。冬でも暖かい。ここならリタの胸にもいい。政孝はさっそく、そこから会社へ通った。”		289.1 タ

		請求記号
<b>福原義春</b> 1931～2023 実業家 逗子に居住		
『好きなことを楽しくいやなことに学ぶ— 福原義春流・自分育て、人育て—』 福原義春著 かまくら春秋社 2011 “ <b>逗子</b> 市民となって約半世紀になる。なぜ <b>逗子</b> に住むようになったかは、東京オリンピック開催と深い関わりがある。”		289.1 フ
『道しるべをさがして』 福原義春著 朝日新聞出版 2015		914.6 フ
『美—「見えないものをみる」ということ—』 福原義春著 PHP 研究所 2014		914.6 フ

逗子市立図書館に所蔵している本の  
一部をご紹介します。



		請求記号
<b>中平卓馬</b> 1938～2015 写真家 逗子に居住		
『中平卓馬論—来たるべき写真の 極限を求めて—』 江澤健一郎著 水声社 2021 “こうして中平卓馬は、来たるべき写真のモデルとして、植物図鑑という概念を創造した。そして、映像論集『なぜ、植物図鑑か』を刊行後、同じ年に、それまでの写真と決別するためだろうか、彼は <b>逗子海岸</b> で多くの自作ネガとプリントを焼却してしまった。”		740.2 エ
『決闘写真論』「インターリュード」 篠山紀信著 中平卓馬著 朝日新聞社 1977 “陽はゆっくりと沈もうとしていた。晩秋の浜に人影はなかった。ガソリンをふりかけてマッチをすった。一挙にぼっと燃え上がり、強い火が噴き上げた。”		740 シ
『なぜ、植物図鑑か—中平卓馬映像論集—』 中平卓馬著 筑摩書房 2007		S 740.4 ナ

		請求記号
<b>森山大道</b> 1938～ 写真家 逗子に居住		
『犬の記憶終章』 森山大道著 河出書房新社 2001 “そんなとき、中平卓馬から電話が掛ってくる。むろん掛ってこなければぼくが彼に掛ける。つまり、 <b>逗子銀座</b> の洋菓子店(珠屋)で日課のコーヒーを飲まないかという誘いなのだ。”		S 914.6 モ
『森山大道 光の記憶』 森山大道著 求龍堂 2023		748 モ